

## 新刊紹介

### 重富真一編「グローバル化と途上国の小農」

重富真一



アジア経済研究所  
2007年

途上国の農産物輸出は一九八〇年代半ば以降、急速に拡大している。伝統的な熱帯農産品だけでなく、食料消費の高度化、多様化にもなつて、新しい農産物が輸出向けに生産される。そのおかげで私たちは、近所のスーパーでも様々な国で生産された食品を買つことができるようになった。グローバル化は、たしかに途上国の農村と私たちの食卓を繋いだのである。本書は、こうしたグローバル化の姿を、途上国の農村に立って捉えようとする。章別構成と筆者は以下の通り。

序章「グローバル化と途上国の小農―農業経営分析からの接近」(重富真一)

第一章「エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード」(児玉由佳)

第二章「ペルーにおける小規模農業生産者の輸出用アスパラガス栽培」(清水達也)

第三章「ベトナム北部山地における大規模私営農場の生成」(荒神衣美)

第四章「中国沿海部におけるリンゴ輸出の拡大と農家経済」(山田七絵)

第五章「マラウイにおけるタバコ生産の自由化と小農」(原島梓)

第六章「ミャンマーにおけるエビ輸出拡大と小漁民」(岡本郁子)

第七章「アグリビジネスによる契約養鶏と東北タイ農家の経済」(重富真一)

第八章「南インド・バンガロール周辺のバラ切花生産に見るグローバル化」(久保研介)

第九章「カンボジア農村におけるグローバル化のインパクト」(天川直子)

途上国における農業生産の実態を研究するとき、「小農」の存在を無視することはできない。小農とは、もっぱら家族労働力を使って、利潤よりも生存のための所得確保を目標として活動する経済主体で、それはかつても今も途上国農村のもっとも厚い層をなしている。その小農の面

前に、グローバル化による新しい市場機会が現れたのだった。

ところが、どのような農家が、どのような形でグローバル化の影響を受け止めたのか、我々はまだよくわかっていない。これまでの研究は、もっぱらマクロデータや流通局面の分析が主であつて、小農経済の実態にまで踏み込んでいないからである。そこで本書の執筆者達は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの農村に分け入って農家から直接話を聞き取り、その経営分析をおこなつた。そして次のようなことを論じている。

まずグローバル化のもたらす市場機会には限定性がある、ということ。エチオピアのコーヒー輸出には近年フェアトレードという高価格を実現する流通経路が加わつたが、その経路の末端に入ることで小農は限られていた。

かりに農産物の市場機会があつても、それを生かすために必要な要素市場はしばしば限定的である。たとえば土地という生産要素についてみると、小農が市場機会をつかむために経営面積を拡大したくても、市場で取引される農地が極端に少ない、あるいは取引自体が制度的に規制されている場合がある。本書では、ペルーの生食用アスパラガス生産、北部ベトナムにおける茶等の輸出向け生産、中国山東省の輸出リンゴ産地農民、マラウイのタバコ栽培に参入した小農などの事例が、それを具体的に示している。またベトナムでは

労働力市場、ペルーでは資本市場の狭隘性も、小農が規模を拡大する上での制約条件となつてきた。ミャンマーの天然エビ輸出のように、乱獲のため原料の減少に直面しているという場合もある。生産物の市場はグローバル化されても、生産要素の市場はきわめてローカルにしか存在しない場合が多いので、そこでの制約条件がグローバル化のインパクトを左右するのである。

地域に十分な資源があり、また要素市場が成立していたとしても、それを利用できるか否かは経営体の内部資源のあり方によつて規定される。東北タイの契約養鶏では借金の担保にできる所有地の規模が、インドの切り花生産では経営者の教育水準や補助金受給資格といった経営体内部属性が、資本確保の制約になつてきた。カンボジアの場合、農家世帯の労働力構成―とくに若年女子のそれ―が外資系繊維企業への就業機会を規定していた。

このように、生産物の市場機会自体、あるいは要素市場、外部資源の賦存量、経営の内部資源に限定性があるために、小農すべてが市場機会を自己の経済的利益に結びつけられるわけではない。こうした実態を把握した上で、途上国農村に対するグローバル化の総体的・客観的な影響評価が可能になるだろう。本書は、その一里塚である。

(しげとみ しんいち/アジア経済研究所地域研究センター)